

助産師問題もう一つの視点

鍛冶良実

財日本性教育協会研究員

「あなたはパートナーが異性だから、子供は簡単に作れていいわよねえ」と仲間からひやかされていたのは、ニューヨークのレズビアン・ゲイコミュニティサービスセンターで、実習生として働いていた時だった。「センターキッズプログラム」は、レズビアン、ゲイのカップルたちの子作り・子育てサポートグループで、そこでは女性同士のカップルは精子銀行などを利用して自宅で大型スポイドを使って子作りしていた。男性同士のカップルの多くは養子を迎える手続きをとり、最も引き取り手が少ない、有色人種で、先天的障害、母体からの薬物の影響、HIV感染などを背負っている子供たちを喜んで引き取って育てていた。

カップルで子供を持つというのは、同性愛者にとっては未踏のいばら道である。障壁を乗り越えて、「子供を育てたい」という自らの心の底から湧き出てくる願いをまっとうし、感謝して子育てをしている彼らに接して、子育てに性別はない、そして性的指向も関係ない、ただ、子供を育てたいという強い願い、子供に対する愛情が重要なのだと実感した。

当時結婚7年目、夫を日本に残しての大学院留学中で、ついぞ自分の子供をもちたいなどと思ったことのなかった私だったが、その後、彼らに潜在的に刺激されたのか、あっけなく妊娠してしまった。異国の地で、つわりがひどくて苦しんでいた時に一番近くにいて気づかってくれたのは、ゲイやレズビアン、そしてトランスジェンダーの友人たちだった。そして、無事卒業して帰国後、家の近くの助産院で、助産婦さんと夫の介添えにより、と

ても良い出産を経験することができた。セクシュアルマイノリティーの友人たちと助産婦さんは、私の子産み、子育ての恩人である。

そこで、最近「助産師問題」に触れて、感じている疑問がある。「助産師問題」の中での、性の多様性やセクシュアルマイノリティの位置付けである。助産職は「女性」に限ると論じられる時、その「女性」が、戸籍も、見かけも、性自認も女性で、性的指向は男性に向かっているという「狭義の女性」のみを念頭に語られているように思えてならないのだ。もし助産職を、「狭義の女性」のみに限るとするならば、それは、「男性」の排除のみならず、「狭義の女性」に当てはまらない、多様な女性の排除にもなってしまっているのではないだろうか。

今まで女性の健康と出産を、愛情をもって見守ってきた助産婦の中には、レズビアンの人だって沢山いただろう。その人たちは、女性に対して性欲を抱く存在ということで、排除されるのだろうか。見かけは女性だけれど、男性としての性自認をもちながら助産職についている人だっているだろう。その人はどうなのだろうか。逆に、見かけは男性だが女性と自認している人は「女性」には入らないのだろうか。

もはや「男性」と「女性」という二分法で厳密に人間を切り分けることでどちらかの権利を擁護できると考えることは、現代の性科学の知見や現実には即していないと思う。助産職がこれからの社会で専門家として確実な地歩を占め続けるために、ぜひ「助産師問題」にも性の多様性の視点を含めて論じていただきたいと思う。